

第5回 ニッケピュアルート エッセー大賞

<中学の部 大賞>

「音楽の力」

箱井慧理

音楽には不思議な力がある。ある音楽を聞くと、その音楽が特定の記憶と結びついて、その時の風景、におい、気もちまでもが鮮明によみがえることがある。私にとってのそんな特別な音楽は、フォルクローレの「コンドルは飛んでゆく」だ。この音楽をきくと、病院の白い壁、四階の端の個室にあるベッド、何本ものチューブにつながれて横たわっている祖父、薬品のにおい、部屋の奥の窓から見た真っ赤な夕焼け、祖父の涙・・・がたちまちフラッシュバックする。

三年前の夏、私は大好きだった祖父を亡くした。その祖父が好きだったのが、この「コンドルは飛んでゆく」だった。私たちの心の整理が追いつかない速さで病気が進行し、最期には意識もうろうとしたまま眠り続けた祖父。その傍らで、祖母はこの曲をかけ続けた。そこで私は音楽のもつもう1つの不思議な力を知ったのだ。その日も、私たちが見舞いに行くとき祖父は眠っていた。耳もとにあるデッキのスイッチを入れ曲が流れだした時である。祖父の両目から、ずっと涙がこぼれたのだ。意識の疎通はおろか、目を開けることもできなかった祖父に、音楽はしっかり届いていたのである。通じたという感動、しかしこれ以上は近づけない寂しさ、悲しさ、戸惑い——様々な感情がごちゃ混ぜになって胸にこみあげてきた。あの時、あふれる感情をどうすることもできずに、ただ夕日を見ていた。

三年も前のことである。あれから、日常生活の中で悲しみはうすらいでいった。でも、「コンドルは飛んでゆく」のメロディが耳に入ると、涙が溢れだす。そして祖父にはもう会えないという現実が、私の胸をしめつける。私にとってこの曲は、これから先も永遠に特別な曲であり続けるのであろう。悲しい記憶ではある。しかし涙の後には必ず、心にあたたかななにかが溢れてくる。それはきっと、優しくった祖父が、今でもこの曲と共に、私の心の中で生き続けているからだろう。